謠曲畫誌

自題

浪速
書林文榮堂

謡曲畫誌叙

虞庭之詩能涵蓋七情扶桑之謡自蘊蓄六義非狂言矣非綺語矣彼五音頏頡者所謂此也聯文張武詩歌釋叙者所謂賦也抖擻結夢魂魄

露背者所謂興也○夷狄蠻貊
齊譜者所謂風也○彝蹈確筋
骨之束者所謂雅也○鼕韋笛
應者所謂頌也○亢木邦之鄙
曲有居多謠謳者音曲之魁
老幼不易之遊喜矣攝城之

畫生橘有税字者免嶺入於
寺漚池彩於玄茲歳壬子之
春摸謠曲之精而百圖既就
水勢濡流下躍鮎雲騰捲硯
海栖蛇男婚女婿非薄技畫
之所敵實韞匱容國之罷也

余愛百畫之筆力爲之慕臆
見圖鮮攜如軸滿十卷卒題
謂謡曲畫誌矣
享保十七年壬子之春
中村平五三迩子記

謡曲画誌序

畫習者見功績深也然史皇
出畫風筆迹名畫有異功古今
不遑枚挙中郭熙之畫状子
序秘紛慰施無昔帯無説
粉墨精雲画如雨降皆妙

一所有助於世在塗庶干
其史宮爲役嘲三皇萬歳吹起
不萬於衆處圓故處豈隱圓
出鐵鏃榛在往於兩尖刃在
截於情之川宮宮前以半而
其子如虜行思於四方旅之官

數遊於李思訓之門以為之先
向去三十年來謹守其不干
嘗授家學於父又攜諸畫百圖
將復擬畫之一變然後秀幕部
圖內無筆力不失其體試觀
李集於嚴選遂為然後檢稽臨

頃來寓於田氏一覽頗示
以嗚呼古名畫猶難免漫滅對
生之後儀劉況吾曹乎雖深講之
亦數請之圖繪稿角六增
藏公以乞學畫貝說模擬尖家
以付于世學云

享保壬子之春

浮素軒橘官貌子

謡曲画誌巻之一目録

謡曲畫誌巻一

高砂

それ能といふものハ容易なる術にあらず十能小よくかなへがたし能といふ十能とハ弓に鞠庖丁馬に躾楽算鷹連歌絃に物かき此十能の上に能と名づくといへり能を猿楽といふぞ鄙しき事其本をたづぬれバおこるか俗に日吉山王の猿乃面にきて舞又桃井播磨守子孫零落て猿楽ハ幸若太夫などいへる牽合附會の論なれど事をあらくし猿楽ハ日本の舞楽にして猿田彦命より権輿猿田彦命ハ文武に長じ玉ふ人舞楽殊に妙なりしとぞ昔に黄帝

雲門の楽になずらへつくりたるゆゑに神前にて舞楽の奏をと
る故舞楽と名づけ後代に至りては能をことごとく舞
楽と名づくれば謡は神妙不測ありて自然の理を
そなへり猿楽の狂言かりそめといへども猶こそ鼓舞の狂言
猿楽の浮舞と以て能中高砂は三百番の随一にしてかざり
なれば嘉瑞の謡なり九州肥後国阿蘇社の神主恵
本田友成は神の告によりて禁裏へ官加階なりし上洛し
昔は神として祭るの冥加よあらざれば位階をのぞむわざならず
今は大切なる事といへり此時友成五位の玉をたまはる
其願成就せしかば住吉の神に奉幣し其悦の餘りに高
砂住の江の松に縁をかりて我が大夫の官加階しける也

高砂

高砂

秦始皇帝

御爵

高砂住の江の松は相生の名ありといふハいつ頃よりか末葉にて尉と姥との相老といふ寿を含り此高砂の全体字と句と意味なく只世にそびえ目出たき謡也松を大夫の官爵といふハ昔秦の始皇帝沙丘へ御幸なり后土とまうでまつり還幸の時道すがら御将ありし折節六月の炎暑ふ万乗の御主にても鳳輦御車にてハ暑凌がたく思召けるとき折節側なる松の大樹十圍にあまりて見へし緑深く枝百尺にあまれて木陰いと涼しくみえてけれバ暫御車を駐納涼をなし玉ふ折から驟雨一しきり降そゝぎ小松葉よりふりかさなり一滴も雨をもらさゞれバ雨といひ風といひ羅綾の御袂もひろがへりにみえて甚涼しく清らかに思召叡感の

あまりに此松に五位の爵を給りたまひし草木なりといへた
雨といひ木位といひ添き体たる帝徳に配つりぞ日本にて
も延喜の御門神泉苑に御幸の時六位に仰て鷺をとらせ
られば鷺に五位を下し給ひし和漢ともに帝徳の目出たく
ありておはし就中松樹は万木にすぐれて本朝の菅神も
に松をかせさせ給ふ九夏三伏之暑月竹含錯午之風玄
冬素雪之寒朝松彰君子徳ともいへり切にありて指譬とハ
右の手には宝剣をさゝげて悪魔降伏の禍を攘ひ
たれ手にぞ内侍所神璽の象を握り給ふ天子三種の神
器を御掌にみそなはし千秋楽は天下万民を撫育した
まひ万歳楽は上君の寿祚のべ相老夫婦もろともに乃諸

陽長久の道理をあらはしてかぎりなき祝言とのべたり

田村

勢州鈴鹿山にて妖賊隠れ人民を殺害せしゆへに近國堵を安んぜず爰に坂上田村麿勅を奉りて鈴鹿山にむかふ妖賊雲霧を起し鉄火をふらして拒戦すといへども田村麿常に清水寺の観音を信じけるゆへ官軍の旗上に千手観音出現し千矢を放ちて終に鬼類一人も殘らず退治せり但鈴鹿山の軍戦は鬼類の妖術といへるは非なり平城帝重祚の時にまうしけれバ嵯峨天皇御ゆるしなく藤家守護の武将なりしより田村麿を撰出し大将軍として

経廉山より関を越先帝と太子は戦ふ時に田村麿は軍
勢いづくともかく百倍して恰神名乃ごとく見えけれバ
先帝の軍さんざんに敗れ軍大将藤原仲成討死して
官軍勝利を得られ田村麿観世音の信ある
霊験の秘なり是より田村麿いよ〳〵観世音に渇仰し
何とぞ菩薩の像堂を建立せんとおもふところあり
或時東山に狩して鹿を追て奥山へ入り延鎮が草
庵に休らひて観音の霊像を拝して私館を移しく
清水寺を建立ありける折から東夷高丸といふもの蜂
起して所々の軍に打勝駿河まで攻のぼりけれバ
田村麿征夷将軍となりて馳むかひ首途乃日

田村（たむら）

なほたのめ
標茅が原の
さしもぐさ
我世の中に
あらんかぎりは

田村

清水寺へ詣てふかく祈誓し勝軍地蔵勝敵毘沙門
乃二像を奉納し延鎮ハ法力を以て東国にお馳下る
かくて両方合戦の時官軍矢盡てすでに敗んとせし
田村麿も忽ち馬より飛をり都の方をふしおがみ多
年信仰の観世音菩薩今威力を垂給ハずんば味
方の敗軍瞬息をまたずとおもふハ臣何の面目ありて
再び都に帰らんやと祈誓絶ざるに小比丘小童子来
て敵の矢を拾ひて田村麿にあたふ田村麿是を矢のお
もいをなし続いて放ちけるに賊将高丸その矢にあたり中
て亡ぬそれより田村麿東夷を治め都に帰り先清水
寺へ賽謝しそれより奉納せしところの地蔵毘沙門

乃二像全身に矢疵刀の痕ありて佛足泥土に塗れ
り帝叡聞ありて敬をおこし給ひていつくし又當る地
しゆ主の桜いふハ数百本ありて弥生の空ハ都第一乃
ながめにて古詩も多し故に謳ふも春宵一刻直
千金花有清香月有陰と東坡が詩をも引きつ
なり今なほ櫻花もまつりに残りて其名所となる
ゆゑ詩客騒人いたりて弄ぶべし

熊野

平宗盛遠江守たりし時當國池田の宿乃長者熊
野が女侍従といふものめしつかひされバ上洛のともなひ
都まで具せられ常に側を離さず寵愛しさまへり

熊野(ゆや)
文(ふみ)乃段(だん)

草木雨露恵
養得花父母

熊野
いふもさら
都の
春も
をしけれど
なれし
東の

かくて古里に残りける熊野が母重病となりて危くなれば侍従いとまを給はりて下らんとせしかどもゆるされざりし頃しも弥生のはじめ宗盛東山の桜花遊覧の催あり熊野も供して行けるに落花を短冊に添て宗盛にまゐらす

いかにせん都の春もおしけれどなれしあづまの花や散らん

といふ名哥を作り暇を給はりて国に下りしとなん和哥ハ本朝自然の国風にて国ふりの人ハ鬼神をもうごかし猛き武士の心をもやはらぐるハ哥なりと紀貫之が古今序にかきのこさるゝ孝順忠誠一首の哥ありあはれ終養の孝を全くせり晋の李令伯が祖母の病によりて陳情の表を武帝にたてまつり過蒙拔擢

豈敢盤桓有所希冀但以劉日薄西山氣息奄々人命危淺朝不慮夕且又是臣盡節於陛下之日長報劉之日短也といふ文と同日の談にして皆肺腑より流れ出る所なりされば李三位中納言卿源氏より叶補も遍倉まくらにて宮成通卿しは侍従

蝦のこしをれのかは屋れいづれなく高くかうかん

とよみてきこえければ三位

あたりもおひくもおほ蝦の名を教もつるれ侍家ざれば

わとことへやさしうもはかりまさるものからとくれけざ

感じおひたる海名一乃奇人なり

放下僧

下野の國乃住人牧野左衛門尉武重といひしもの
あり相模國戸祢の左衛門尉信俊と無二の朋友なり
しが或時信俊武重が館へ訪ひ来り武重大きに
よろこび終日將してあそびたはふれ野外の酒宴あり
沈醉して武重前後を失ひ大言吐信俊元来
性急にして大きにいかり只一打に武重を切殺す武重が
郎等信俊を取圍主の敵一寸も遁さじやと拔連
て討かゝるに信俊は東國に名を得たる力量早
業打物の達者にて家乃子郎等も究竟の兵
なれバ武重が郎等四角八方へ切ちらし本國へ

ありけるかくて武主が二人の子兄ハ幼少より出家し
て当国安穏寺の禅僧なり弟ハ小次郎武光とて父
小次郎父の敵を狙ひんと国を出けるが生て再ひ
かへらんとけれバ今一度兄僧に対面し後世の
事をもたのまんやと安穏寺へ立寄ける禅僧ま
ば禅僧がいつて我武門をおは師となれバよと止
て敵を討てハ殺生戒を守るの罪のがれがたし
されども父の仇ハ共に不戴天といへど和殺の敵
を打給ハん事拾なるとも孝志をとげんとて
兄弟諸共めぐりし放下師の姿となりて相模の国へ
立越なるされども信後ハ萬事用心堅固にて討

放下僧

李将軍
りしやうぐん

利根信俊
とねのぶとし

放下僧
兄
放下僧
小次郎

べき便なく孫どもも陽氣所發金石亦透精神一到
何事不成終にハ本意を遂べしとて便をまちゐる處
に信俊伊豆の三島に詣けるを聞て由がく追付
故牧野左衛門が二人の子父が仇を報ぜんとて是
までまゐり信俊を見参して散二ゝ散三に切かゝる
信俊大勢の郎等と共に拒戰へども二人が孝志怨
氣天を突くらの太刀先にあたる者なく信俊終
にうたれぬ又謡れ本文に母を虎に殺されその野
外にて虎に似たる石をみてよく矢を放ちしに羽ぶ
くらせめて立しとハいへり李將軍高綿が故事
にて兄弟二人威勢盛なり信俊を打とりしこと

鵜飼

鵜飼

事にさひ川邊の石を拾ひ多くして法華経の要文を書て石和川に沈め懇に廻向ありて今に此石残りて希には拾ふ者あり文字少し消れど大小鈎柿に似たりといへり或人石に物を書ときく消滅せざる事ハ上人の法力までもなし亀の尿墨に入て書ときハ石に深入する事すべ除いつまでくも不滅といへりされども日蓮日満の名僧妙なるにハあるべし扨日蓮鵜飼が為に寺を石和川に建られし鵜飼山遠妙寺とて今にあり

謡曲畫誌巻一終

謡曲畫誌巻之二目録

謡曲畫誌巻二

難波

人皇十七代仁徳帝ハ難波高津に都して我か帝かき仁恵の御門なりし此君大鷦鷯の皇子にてあり御弟皇子稚郎子と昆弟の御間帝位をゆづり合ひ給ふこと三とせにおよびし古代泰伯の至徳なり配ふせなる仁君なりそれが唐土の王仁といひし賢徳の相者仁徳帝の即位を賀しまつりて

難波津にさくやこの花冬ごもり今ハ春べと開やこの花

と詠ぎしなり此哥比喩の躰哥にてむかしいろはの四句の偈たりしも此哥と浅香山の歌作と紙書して

難波

難波津に
さくやこの花冬ごもり
今は春べと咲やこの花

難波
高きやのぼりて見れば
煙たつ
民乃かまどは
賑ひにけり

児童に教へしとぞ儲君の御號を春宮とかしこき世あり
より権輿まりしとぞ斗帝万民の貧苦をいてまず哀み
三年乃間民の課役をゆるし給ひ御衣弊破れども新
に織らど甚だ徳天にかよひしかば風雨時にしたがひ五
穀みな饒みて土民抃野百姓おのおの貢を献じ
かば䂓兎あらなかにおいて高臺に升り除を給ひ民竈の
煙のにぎはひなるを叡覧ありて
高きやにのぼりてみれば煙たつ民の竃ハ賑ひにけり
御寿も百十歳をたもたせ玉ひしとぞ仁者ハ寿と
あるは聖言誠なるかな

●萬平

むかしより萬平のこゝろいを忠勇のこゝろとり称ひし
と称せり木曽義仲が手勢五万余騎の中より
今井。樋口。楯。根井。これを木曽の四天王といへり
萬平ハ四天王の随一なり木曽河原合戦にお
まけ粟津の原にてハ萬平と主従二騎になりさ
しもの義仲も心ぼそげに日ごろハ何とも覚えぬ薄
金の鎧今日ハおもく覚ゆると有けれバ萬平申ける
は御身もつかれ給へど御馬もよはりければ何に
よつて一領の御着背長を俄におもくおぼされ候べき
それハ御方に御勢がなけれバ臆病でこそさは思
れバ今萬平一騎を余の武者千騎とおぼしめし候へ

世の業は
うれを
見とり
一ツ松

八王寺
粟津森

兼平

激しきかな大勇忠義の八幡太郎義家の衣川の戦よ父子七騎となりたまひし時敵二千餘騎押寄たり義家義家此敵を一人して防がん間皆落行てのちにけり膽勇と同日の談なり此時兼平そく一騎泥踏ゆる大音あげ遠からん者ハ音にもきけ近からん人ハ目にも見よ我ハ木曾殿の乳郎従今井四郎兼平生年三十三と名のり寄來敵八騎射てをくし十七騎よ手負負を甚身爲すも負ども自害せし分野目でるりあれど後代よ名をあぐるなり

千寿

本三位中将重衡ハ源氏の囚となり梶原に倶

やゝ経て鎌倉にかゝり物せめ宗茂は郎けしとおやし
くらある雨夜〻千手の前琵琶琴をかきならして
羅綺之為重衣妬無情於機婦管絃之在長曲
怒不関於伶人といふ菅家の御作の朗詠をうたへり
されバ重衡乃曰此朗詠をせん人ハ北野天神毎日
三度翔りて守らんと誓言あるを承りてなるされども
重衡ハ今生にて捨られたる身なれバ助音しても
及ばじとのたまひしかバ千手乃前雖十悪猶
引接甚於疾風披雲霧と云朗詠をして扇とり
極楽を願ん人ハ皆弥陀の名号をとなふべしといふ
今様を四五遍うたひすましけれバ三位中将普通

千手（せんじゆ）
重衡（しげひら）

千手
重衡

又は此楽を五常楽といへども今千手がうたふは後生楽とこそ観ぜしれやがて往生の急をうんとぞいはれて琵琶を取くらべそのつとぞ千手も哀ひし後千手も身を退き山城の国醍醐の日野といふ所に庵をむすび千手さかりし時は在殿の陵のかたはらにて琴を弾ぜしとぞ其旧跡今に残りて千手が琴引しといひ千手の墓も其所にあり

鉄輪

むかしある公卿の女あまりに嫉妬ふかく貴布禰の社へ詣て七日こもりて申やう帰命頂礼貴船大明神七日こもりしるしには我を生ながら鬼となし

なす事と祈りけれバ明神あらはれ給ひて縁ある男に
成さバ宇治乃河瀬に三七日浸るべしとの示現なりし女
よろこび教のごとくにせしかバ貴船乃社の許に
てすぐる男となりしと玄恵法印が縁巻に書けり
さて神慮にかなはざる事なり此神ハ心直
渾沌て端なし又神は仁なりといへども何ぞ嫉妬
して人を殺さんとする者に害私の明神與し給ん
や女の不かしき一図にして丹誠をとる所感応し給ふ
是又を蒙るは神慮乃不可思議なり示現とかまへ
てあしき祈をもし給ふ顛じてかく成る事あらんされバや
嫉妬のおもひ消滅させる是神の仁道にあらずや

鉄輪

貴船大明神

鉄輪

清明が奇怪も神徳の感應をあらはすと示すなり寔り
まされば清明神加護渡しまして清明とも人壇上の行
ふくゆきとゞきてまたにあらど悪鬼退散ハ示現成就
あらたにしやく一心乃精どり示給守護の擁護しも
まうりて清明の加持も其のはぢうら神れなそさあらね
示を鉄輪乃ことひろよ述しその也

舟弁慶

此任の趣意ハ越王勾践と呉王夫差と戦ひしよ越
王はそのよおまけ呉国乃囚となり土の牢にのまり三
年の恥恨をうけあしに勾践の臣范蠡主人越王乃
ためよ千辛万苦して謀をめぐらしはそのよ越王を助て

會稽山にて再び戰ひ終に勝事を得て會稽の恥を雪しなり今義経も志ばらく梶原が讒言にあひ玉ひ是は同流の恥を忍でいづれも弁慶といふ者二乃忠臣范蠡となりて君を輔佐しけれバふたゝび會稽の恥を清め玉ふべしといふが正意にてあるの詮なり落人の身として静といふ白拍子をめしつれ玉ふ事は弁慶が智謀にて都へかへさるゝしかるも越王乃西施といふ美女を呉王へおくりし陶朱公がはかりごとに同意味なり大物の浦より難風にあひて吹もどさる弁慶が丹誠にして叡山にありし者は天台の佛経に通達せし者なるを悟

舩辨慶

みづからその也平家の大将知盛(とももり)乃亡魂(ばうこん)浪の上にあらわれて名のりかゝりひろまいあらば難風乃ときは験者(げんしや)の丹祈自然(しぜん)と風波乃静まり舟をすゝめ舟子すくふうしとぞ

謡曲(えうきよく)の画(ゑ)誌(かん)巻二終

謡曲画誌巻之三目録

謡曲畫誌巻三

老松

梅津乃何某といふ洛西梅津の里に梅津左衛門
行長といへる者あり九条の曹司常盤の前乃父也
則梅津の里に菅家の御父菅原宰相是善卿
乃別業ありし太宰府乃飛梅も此の梅津の里
別業の御庭よりありしゆへ梅津と名づけられしとぞ
又天神の御誕生も此の梅津ともいひ又洛陽
菅右神ともいへり扨老松といふは天神太宰府
より常随給仕乃童子十四歳にして甚聡明なり
しかば天神乃御心ありしひ御家領紅梅殿と

老松
宰府天神社乃景
紅梅殿

古寺の舊跡
輪塔
瓊門

ひさしく籠居しまし〱老松童子ハ出所を志れども
自然と飛梅の本に添ひまゐらせしを天神めしつかひ
給ひし天童なりしゆへ老松明神と崇めたり前
代の寿神にて瑞験端的なりける神ゆへ大塔宮
も北野御信仰の餘り此老松明神の姿を唐金
にて鋳させ給ひ常に御肌の守りとしまひしゆへ殊にその利
生すれ遇を給へり天満宮ハ御在世乃内梅が香乃
遠くして元よりなく松の常盤にして色をかへざる翫
操と深く愛せさせ給ひ筑紫天拜山にて告文
を天よりたまはせ給ひしかば松と梅との両間に御足
と翹給ひ老松童子も豊記の晨まで天拜山によ

在りとぞ烟添柳色看猶浅鳥踏梅花落已頻とあ
る名詩を常に吟じさせ玉へり此詩ハ唐の太宗学
問を好ミ玉ひし好文木の名然衛せしゆへなりその理よ
りて天神を文道乃太祖とも崇好文木の縁ふかく塩
梅の花とも申する又白片落梅浮澗水と云白楽天
雪梅の句然常に誦く給て御愉吟ありしとぞ天神
天拜山乃御修前に
宵の間や朝の霜ふ信のせざく如だくて有明の月
右ハ天拝の秘前といひて毎日一首づゝとも唱ぎされ
ハいかなる願望も一百日の中に成就するとぞ故に法
人信公のため余三遊子編述の一代壽要といふ書にも

老松

好文木

伊勢武者はみな緋威の鎧きて宇治の網代にかゝりけるかな
これを的にせし陣場それより勇又優にして称といへり
伊勢武者は黒田後平四郎日野十郎乙部弥七三人也
中にも日野十郎は古兵にて弓の弭岩の狭に捻立
橋上三人の者もこれをすぎて助命たまふ也才三十にて剃髪
辞世有に
埋木の花さく事もなかりしに身のなる果はあはれなりける
剃髪の武義を知らざる人は此辞世後悔迷情の辞と批判
哀れなる果は知れば出て知らざる人あり剃髪の名
し士死さ後より迷情とへきや辞のさい剃髪源家の嫡流
にてじまし禁中守護の番終つとめ花さく事ありて

キセンガダケ
朝日山
恵心寺
ウキスノ塔
平等院

宇治乃景
頼政
ヨチカタ

井筒

井筒の女ハ紀有常が女子の名なり竜田といへり往昔ぐひなき賢女にて兼れ道も法くなりしに常に深窓に育まて婦のなるに逢し来女の時業平と井幹のもとにていたひすびし花戯をなし頑是なき時より親しみ雛遊に業平と竜田といま夫婦なりしといふなれど女なるに一念こぶいつか終に他まよ嫁ゆるなさしなく我思ひ髪の肩るとなるハ君ならでたがあぐべきと何がな年の志操とおられきり業平ハ好色の人と覚てある人あり貫く色よ耽るるの人と云れど風雅のなるになさし篤なれバ我階老同穴のかなえひをうちと女ハ婉娩聴従よしてやさしさ

頼政（よりまさ）

伊勢武者ハみなひおどしのよろひきて宇治のあじろにかゝりけるかな

かの女を一生の配偶と吟味なり竜田の女と夫婦のかたらひをなせし初めの嫉妬なとの悪念もおこらんやおもふらんとおもひ河内国高安の邑へ通ひて見せりまし也竜田の女

風吹ば沖津白波立田山夜半にや君がひとり行らん

と詠じて夫女に通ひし事はなれてもとにかへりしとぞ此寔風烈つき深夜にさしき竜田山を君ひとり越ゆるでもしや盗賊のあやまちもあらんと終夜安からじおもひつまざりしも也白波とは盗の事也唐土白波谷といふ谷に盗賊ありて人をなやましたる也此女の貞烈心操に感じて一生むつまじくかたらひしとなり

井筒で
風吹ばおきは白波立田山よはにや君がひとりゆくらむ

井筒

鉢木（はちのき）

雪中の景

捩れ木

大友の皇子に襲はれ給ひ吉野の山に幽遂志のびませ
しまひ国栖の翁が家によりかくれさせ給へりある黄昏
翁が家にて天皇琴を弾じさせ給ひしかバ天女舞
くだり羽衣をひるがへして舞しとぞ天皇其乙女
子が袖をかざしひとゝびかへしまひをその御製ありしより禁裏
五節の舞は節会に権輿まつり僧正遍照の乙女乃
すがた志ばしとゞめんと読しも五節の舞姫清見原
天皇は吉野乃御有様を追くよみてる故なり
供御には根芹をそなへしも正月七日なり七種の兒ん
うかもは此御代より蝦蟆ありとぞ今の代までも吉
野より国栖の翁禁裏へまいりて国栖乃舞をそうす

也とぞ先代天智天皇ハ乞食の相ありけれバ相人申せ
しかバ其果をたださんとおぼし近江国に揖りまして
けるが飢ばふて飢に臨ませ給ひし時漁人鯉魚といふ
魚を借て供御にまいらせし此人ハ今の贄乃節会ハ天
智の御代より始りけるといふ又翁がはなし国栖魚よ
り始まるともいへり若菜摘も菜摘川の此故事
よりおこりとぞ北野天神も此若菜の事を野
中若菜世事推之蕙心炉下和毒俗人屬之莫
指と書給へり天武の御代よりなりて天下よく治り對
馬より御かく白銀いで踏節会も此御代よ
り始まりしとぞ民をあはれませ給ひし日本国中

国栖
清見原天皇

圀く
栖ず

り大赦行はれてより久しく天下囹圄空しとて六
十六国ともに牢の内に罪人もなかりしとかや
是皆国極乃こゝろひも寛仁の君子なればかくのごとき
霊瑞ありて漢土にも仁者には敵なしといふちかうを
はくりしこものなり

謡曲画誌巻之三終

謡曲畫誌巻之四目録

養老

謡ハ雄略天皇の御宇とあり實ハ人皇四十四代元正天皇の御宇也されども此養老の瀧をおろかなるの人雄略天皇と元正天皇と二十二代の事紛錯なさんや作者小意味ありべし瀧ハ雄略帝の時に湧出し其泉ハ元正帝の孝子に出るなれ美濃国多藝郡多度山の麓に一人の賤男あり父母ハ年老て強く酒を好みて酒なければ食もの事すゝまず此男至孝の志ありといへども其身もとより貧しけれバ風よおきて山に入薪を一把く市に鬻其價をもて美酒を調へ瓢に入てたくはへ朝夕父母を慰め

養老（やうらう）

養老（やうらう）

故人眠早覺　夢六十年花
心茅店月嘯　身板橋霜漂

老を養ふなどし国人孤独のこゝろをもとゝす孝者百行のもと
基萬善之源也天神地祇も感じ給ふあはれみ給はざらんや
此男或時山に入て薪を伐けるに路けはしく倦ければ
石を枕としてしばらく睡眠けるにいづくともなく酒の香しき
けるに夢さめてあたりを見れども酒もなし怪しくおもひてその
辺を見まはりけるに石中より湧出る泉のながれ酒乃色に
似たれば汲てこゝろみに美酒にてぞありける男大きに悦び
因て我家に汲もて飽までぞ父母に供しかば郷里奇異の
おもひをなし醉郷氏之国四時獨講温和之天酒泉郡之民
一頃未知涯浜之地寒に月出度醴泉水として養老乃滝とぞ
名付けるかゝる天感のくだりけるも天聴に達し醴

三年秋九月帝彼地に行幸あり滝を叡覧ありて至孝の
徳を感じさせ玉ひ年号を養老と改元あり彼男を美濃
守に任ぜられける故にぞ家富栄昌して益孝を尽しける

實盛

斎藤別当実盛ハ源家譜代の勇士にして保元平治の合
戦に度々手がらを顕しける者也源義朝六波羅の軍に打負
東国へ落られけるに山法師三百余人千束が嶽に待うけ落
人の物具撤と聞ければ実盛真先にすゝみ出て義朝ハ
下宗徒の人々ハ討死せられぬ我ハ信国の假武者也本国
へ帰るにては罪作りに殺玉ひて益なき物具をとれかし
通りて語りけれどいひもそぞ撫児を取て投られバ老僧ども

實盛

實盛（さねもり）

氣霽風梳新柳髮
氷消波洗舊苔鬚

若大將も前後を爭ひ競集り兜一つとらんとて木の根に
蹉跌谷に宛轉備を乱て遙に義朝主従これを見て[illegible]
鐔に連り吉一丈余りの大太刀を抜ずらつさそれ
事計なるぞ甚傑なれば討とらんと長刀をふりかざし追かけ
より実盛大童になりて太の中指なれて刺殺も殺によるぞ
小勢ながら護る義朝が郎等二段最別當実盛也主君の
跡を慕ふて東の方へ下る時は僧徒の身として脚うすでこそ
あらかじめ討留んとは奇怪なりしぞ実盛が首途の軍中指
不打ちすべし指を見んとて呼ばゞ悪く聞し立つ迄叶ねど
おもひて引帰て惜哉実盛壮年の勇戦一騎当千の
兵なりしに晩年に及びて勇屈し義折絶て平家に仕へ

恩恵厚かりしゆへ此義兵の時も今も源家へ志ある者は
叶はざれども武名をおしきゆへ鬢鬚を墨にぬりて錦の
直衣を着して名誉を衒し討死せし也名将勇士と
いへども年老ぬればおもはぬ不覚も有事ぞかし古今も盛
年不重来及時当勉励といへり大宅光任が其子光
房に相かまへて年若ければ名を惜しみ討死せよ老ては命をしき
物と教加茂次郎義綱降参せんといひしを子息義弘が
口惜事かな今十年昔ならばかゝる仰はおうべき物をと
諌しは不朽の格言也昔為京洛春花客今作江湖
潦倒翁と老者を歎し事も宜なるがごときをいへ
なるべし

絃上
須磨の浦乃景

弦上

弦上とハ大唐の琵琶乃名なり仁明天皇の御宇掃部頭貞敏入唐して廉承武に合し流泉啄木楊真操の三曲をうけ弦上の琵琶を所望して我朝に伝へたり人皇六十二代村上天皇ハすぐれたる琵琶の御上手にて或夜独南殿に出御ありて月色朗なるに御心をすまし弦上の琵琶を弾じたまふ精深更に及て蔓草露深人定後終霄雲盡月明前といふ古詩を吟じさせたまふに廉承武仙人出現して上玄石象の二曲をさづけ奉る故にこそ初乃三曲と後の二曲を合て琵琶乃五曲と申とかやそのゝち時代推移りて妙音院の太政大臣師長といひし人ハ五曲を伝受して

天下無双の妙絶也謡にハ此大弦上の琵琶を持入唐して奥
儀をきはめんと播州須磨の浦まで下られたるに村上帝の霊なる尊霊
磨の塩焼翁と現じ塩屋小家の琵琶乃音に入唐をとゞめ
まひしと有此事いまだ實録に考ずといへども物の名ときは
しれハ天地も感動する事なれば有得べきまゝは非どもまた此
太后在世の間琵琶の妙なる指くの不思議あり治承三年清
盛入道悪行乃餘り此師長を尾州井戸田へ流せし時當國
熱田乃社に詣まひ帰洛の事を祈られしに神明納受の為
うしよ上玄石象の秘曲を弾じ玉ひしあり偏鄙の土民なれ
ど琵琶の音敬関ちるべきならねども大絃ハ嘈々として急雨
小絃切々として私語さすが妙なる秘曲なれば田夫野人も首を

絃上

是ならなき魚鱗まで白浪にゆられかしおゆまつ曲浦て琵琶を
弾おはさしとりけ時宝殿大ゆり鳴動し玉のとされぢゞめたるを
神明納受ありと大に感泣嗚咽未そのりしくおがりけり
かくるく明年めしかへされ本官本位に復し玉ふ八音
克諧無相奪倫神人以和といへるこのまゝやかなりし名誉也

紅葉狩

信濃守惟茂は桓武天皇の苗裔上総守平兼忠が一男なり
童名余五といふ幼より智謀人にすぐれ勇烈双者なし伯父
貞盛幼少の勇智を愛し養て子とし成人におよひて武
名世に高し奥州に住居のとき沢股四郎諸任と争論の
事あり諸任武威不意に惟茂の館をかこみ夜討かく惟茂

の家の子郎等身命を捨て防ぎ戦へども忽ひやうぬるも勢
ひ既に落城に及びければ惟茂かくては叶まじとて館に火をかけ
焼上我身は池の中にかくれ伏を諸侍は討漏ぬと悦び火
消て城に入来て惟茂押寄り惟茂が老翁夜討にせんを
は思ひよりとて只一太刀に諸任を切殺し再び武名を奥羽に
ふるふのち住所戸隠山に入て紅葉狩を狩絶し随風落
葉含蕭瑟潤石飛泉弄雅琴と口ずさみ山中を吟行
せられば官女多く集り幕うちまはし屏風を立廻し
酒宴のまうけ有り惟茂も席に推参し沈酔のあまり女の
膝を枕とし前後なく睡眠られ官女悉く鬼女と変じ惟茂
を目がけ飛かかる所に惟茂夢の告にまかせ名剱を抜て退治

紅葉狩

紅葉狩（もみぢがり）

やつれけれバ威名ます〳〵盛なりし事太公望も知る故
事也されども惟茂ハ智勇兼備の大将にて官女の宴席
へ無益と推参する人にあらねど古丹波国大江山に強賊かくれ
人民を悩せしゆゑ源頼光四天王と共にむかひ入強賊の大将酒
顛を討とられし事を後代妖鬼退治といひ伝ふるを移してこれ
も強賊多くかくれ居る所を惟茂推よせて討とられしを後世
事をねじ此鬼女酒宴を附会して惟茂の武勇を潤色する
ものなるらん

遊行柳

此諺ハ昔一遍上人諸国修行して六十万人決定往生の札を
流すにあまねく東国をまハりけるに奥州白川の関にてある

き此翁一人道しるべしけるに古塚の柳の下を通りけれバ此翁
上人に向ひていひけるハ此柳ハ昔西行法師當國に来りし時も
水無月乃比にして暑をしのがんために休らひて
道のべに清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立どまりつれ
とよミ給ひしより宗祇も詠ぜし名木として今のちも十念授けて古
木の陰によるとて我なんどゝ上人不思議におもひねば朽木
乃柳の精我に詞をかけけるにこそとて通夜念仏し流水羅
紋海燕回柳條牽恨到荊臺と吟じ衆生称念必得往
生乃功力にて草木國土悉皆成仏と廻向しけるに柳乃古
木すなはち烏帽子狩衣の此翁と現じ浄信の教なくハ
非情の柳何ゆへに仏果乃臺に上らん有がたくも浄法中に報

遊行柳
道のべに清水ながるゝ柳陰しばしとてこそ立どまりつれ

遊行柳

蹴鞠の庭乃面四かゝり木隠
枝きれて

恩徳の曲を舞うきけるに生まれたり常寂光とかへさ
まば一翳眼にあれば空花乱墜すといへり千変百怪みなもて驚
に非ずいはんや非情の草木何ぞ有情の気を移さんや然りと
いへども妙不と怪力乱神に至りては一概に論じがたし後白河
院の勅願蓮華王院の棟木は熊野山の柳一本にて三十
三間をつくりし木髑髏ありて風ふくごとに法皇頭痛し玉へり
ちくにおゐて蓮華王院を建立ありしかれば則頭痛も平愈
ありしとけり俗間にも頭痛山平愈寺といへりこれをよく考る
ときは一遍上人などの有徳の僧なれば柳の精気ありとも
いかなれば草木国土悉皆成仏ともあれば一偏に論じがたし
謡曲畫誌巻四終

謡曲畫誌巻之五目録

謡曲畫誌巻五

加茂

抑上賀茂別雷皇大神宮ハ山城の一宮にて王城オ一の守護神也今の京を平安城と申も東よハ賀茂の嚴神跡を垂玉へ西よハ松尾の大社を作せる二社の鎮護に依て万代平安也といへり嵯峨天皇勅願の事ありて神に斎院を立玉ひしより以来神号の外の忌言葉伊勢と異なる事なく宗教又庸常にして附に當社の祭ハ四季オ一の神事にして祭といへバ葵祭の事也しかいへバ叡山寺といへバ三井寺と云がごとし斯大社にてかくせ玉へバ神伝鎮座の縁起秘中の深秘にして社家の人副漫に説東良し古より神ハ穆そしよる所以の感を益の為懼れバ分明

賀茂

石川や
蝉の小川の
清ければ
月も
ながれを
たづねてぞすむ

よ從ひて説れども儒人其神の由来をばすて今此の丹塗と與に記せバ自他の通説て然付今神傳を述るもの也健角身命と申ハ高皇産霊尊の曾孫天神魂命の子にして日向國に降臨しまし神倭磐余彦天皇軍を起し給ふ時八咫の烏と現じ先立て大和國葛城に止りまし夫より山城國愛宕郡瀬見の小川に飛来り清き流をめでて此所にすみまします今の加茂川これ也鴨長明が

石川や瀬見の小川の清ければ月もながれをたづねてぞすむ

とよめるハ此事をいへるなり夫より丹波の國伊香古耶姫を妻とりて一女を生ます名を玉依姫といふ又或時玉依姫瀬見の小川に逍遙ましし川上より丹塗の矢流くだる姫何心なく此矢をとりて家にかへり床の中に置給ふに其矢忽麗男と変じて玉

依姫ニおいて懐孕し一男子誕生す稍成長まして祖父健角身命その夫神を知らんと欲し玉ひ諸の神を集め七日七夜の神宴を設けて其孫神ニ謂て曰く此酒を飲て其坏を汝が父ニ与へて見則さかづきを取て矢の前ニ指置て天ニ向ひ屋の甍を穿て昇り玉ふ別雷乃神是なり當社の神徳なり

世の中に知らる人ハありとも我を祈らん人ハなぞ有ける

斯神徳あれバ結縁渇仰の人神明納受疑なし俗間黠人ハ鬼神ハ敬而遠と云語をもつて不埒神事ニ無崇とかこつやからあるべし抑中華の鬼神ハさもあるにてもあるべかれども日本ハ神道神を尊ぶ所謂なし不義の富を祈らバ神ハ非礼を受玉ハずバ却て其身の罪ともなるべし誠をもつて祈誓せバ正直乃頭ニ宿り

賀茂社乃景
岩本明神

本社
ハレド
タスノ橋
ハレモトノ明神

せざりまゐらすれバ豈納受ましまさんや今ぞ仰べし祈べし

鞍馬天狗

源義経ハ左馬頭義朝の八男童名牛若といふ二歳の時父義朝うたれ給ひしかバ牛若丸も母の常盤とともに平家の囚となりける清盛常盤を寵して妾とせし故牛若丸ハ恙なく常盤にそひて生長し七歳の春門におゐて賤の童と共にあそびけるに平家の士上総守忠清かよひける所ハ士大将にて威勢盛なる忠清なれバ幼ものゝ共まぞ皆恐れて方々へにげちりけるを牛若ハ只ひとりさもなく自若として居給ひけれバ先乗叱言して上総守殿通りたまふに童ハ奈何退ざるぞといひけれバ牛若少もあへず忠清ならバ下馬して通れとのたまひける忠清大きに驚きて急ぎ馬より飛下り

膝行頓首して素直に清盛の前におはし身を細くと語る牛若
幼といへども大将軍の氣像あり彼を生けておかバ行末當家の仇ならん
とくとく殺し玉へとすゝむるされど清盛常盤を寵愛する
最中なれバ殺すに忍びず只そのまゝ置んも遠慮なりとて
とて鞍馬寺へ追上せ東光坊阿闍梨覚日にあづけける
牛若やがて今は遮那王とぞ申ける成長に随ひ報讎の志
ふかく何とぞ義兵を起し父兄の恥を清め再び源家の名を
揚んとおもひ玉へども武術に不精してハ大望なりがたしとて當
山の奥の門に夜々祈誓ありしかバ此谷の大天狗僧正坊に見参し
飛鳥ノ翔。虎乱入。蜻蛉返。翻車などいふ秘術を伝授し玉
ひしと也去れども此事古記にあれども兎角秘術といふハ近世の事

鞍馬天狗
くらまてんぐ

男の様言は甚しきといへども難和にして吉岡へ忍び行武坊乃
天井より忍びより隠れ居たまひし夕紙大宗のつきそ二百余人にて彼坊を取
圍みけり鉄桶のおとし義経かもさいはひに角を所々かへ傷くして破風口
より屋へ飛下りまゐりて大宗の大に驚きあきれてそ臆しとうへ揃して居
これは義経事なく手を揚と立去まへりこれ皆心に男のちとふ俗人乃
及ぶ所にあらず今千葉流といふ兵術あり義経在世の時忍法の奥儀悉く
千葉氏におゐて伝へしまへり遁法也其術摘捨在方従角極洗の十六法也是
兵術に非ず心術の兵也又義経衣川にて生害のまへ全く虚説之義経雅
の希有は良将恭衛などが軍に於て退治する物に非ざる蝦夷へ遁れ居
して天然をふて終りまふといへる説也東鑑には義経の首経金にて到
来の時異乱により首換じかりけるとありて実は義経の首ず

鞍馬天狗

はかなきより先縁をなすべきにあらず孫どもも仇首なるをあやぶめり

松風

松風村雨兄弟ハもと摂州須磨の大領何某が女也兄弟の母病死りて
後妻を娶りて継子継母となりて深く二人の継子をにくみ
何とぞして追失はんとなしける或時兄弟の閨に男の衣をかくして又
出これをとらへて大きにいかり父母の許容なきはかりける不義を何とする奇怪
なれ二人ながら搦捕沈めにかけんと家の子郎等に下知しける松風が乳母
ま夫乳母とともに兄弟の女を介抱して松の蔭で逃海へ走
落行に跡より追手のかかりければ乳母に方商人船を頼みて女
房達と共に附船の中に隠れそふて我身ハ船に残りて
我々のむかひを待しる大剛の者なれば太刀にて追手の者を

付てもかの両人舟をとゞめしハ人をとりて世を渡る悪人なれバ此女ハ我子にハあらずそれ幸なれと播州須磨の浦まで来りて此浦の海士(あま)の長(おさ)がもとへうりしに二人ともに容色(ようしよく)人に勝(すぐ)れ心さま殊に優(やさし)かりけれバ海士の長(おさ)も我子とひとしく愛しけるを光孝天皇嵯峨(さが)の芹(せり)川へ行幸有て鷹狩(たかがり)し玉ひしに在原中納言行平卿供奉(ぐぶ)せられけるに其齢(よはひ)耳順(じじゆん)にちかきまで時に遇(あは)ねを憤(いきどほ)り

翁(おきな)さび人なとがめそ狩衣(かりごろも)けふばかりとぞ田鶴(たづ)もなくなり

と狩衣の袖(そで)に書付ける帝叡覧ましまし甚不祥(ふしやう)なりしと逆(げき)鱗(りん)ありて須磨の浦へ謫(たく)せらる配所の寂寥(せきれう)たる海を望て眺望(ちようばう)し玉ひしに物色(てんそう)牧馬頻嘶平沙渺々行路征帆尽去遠岸蒼

松風

松風

立わかれ
いなばの
山の
峯にお生る
まつとし聞ば
今かへりこん

さらに吟じ玉ふ折から塩汲の女大勢汐汲を通りけるに松風村
雨も其中にありて嬋娟両艶秋蝉翼宛鴛双蝶をも見にとぞ見え
かゝる賤業をすべき者とも見えざれバ行平筆を挙ていづれの者ぞと汐
為皆近くバ二人の美女ありて姉妹となりて後それハ行平衰にたかひ
村に須磨の浦も住ひ三年の間配所の伽とぞ志て居ひたりしが行平
平都へ召されて其後女ハ須磨の浦にそふすみけるが二女の塚今の世までも此
浦にありと聞じ其村舎を今に松風村雨と見分けハ海士の女のかたちといへ
藻塩を汲婢女にはあらど昔須磨浦田井畑村に当有の塩竈あり
樵木島牧百人を使つり松風村雨ハ其女にて源家に生長給出苑
結まで独小路とぞ行平海邊吟行の所見すれ美女と見えまひて
往来を問にて婦人で女となりまゐへさど

花みんとむれつゝ人の
くるのみぞ
あたら桜の
とがには
ありける

西行櫻（さいぎやうざくら）

西行桜

柳さくらを
こきまぜて

とおもひ西行これを戯て
花みんと群つゝ人の来るのみぞ可憎さくらのとがにハありける
と詠ぜし時桜の木陰より老翁一人出現し今の詠吟に不審あり
あらぬ桜のとがにハありけるとハ何ゆへとがといふぞといひけれバ西行か
こ我は花を愛するの花の媚をも愛するハ年々歳々花
相似歳々年々人不同飛華落葉を観念し厭離穢土の
思ひを兒べき欣求浄土のいとなみに常は山本に對する遁世の
人ハ我心をたて花毎に東馬門前に群集して浮世を世
隠家都る花見酒宴の場となるゆへにこれを厭てよめるなり
翁又云浮世とみるも山とみるも唯其人の心にあり非情の草木
何ゆへか浮世の咎れあるべきと問答して失にけり寔に桜の精なりし

いれ円宕志ありにいわゆる遁世閑居の譬喩也といへり西行在世の間桜を花すること甚しかりく洛西よ竹林付庵に桜をうゑ常よ此木乃下に在して仏名を唱ふ歌付

願くハ花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月乃比

かく歌を詠ぜしに素懐のごとく建久九年二月十五日此桜の下にて寂とその桜今に嵯峨法輪寺の南山田村桜元庵にあり土俗西行桜と称す此木ハ別西行草庵の旧跡也

張良

張良ハ代々韓国の相也秦始皇これを為よ韓国亡びしかバ恨骨髄よ入何とぞして主の敵なれバ始皇帝を討んとさまぐ謀をめぐらしける始皇東遊しける蒼海公といへる大力量乃

人をわたしては蒼海公に許諾して百二十斤の鉄槌をもたせ滄浪沙の
ほとりに始皇出の下を通りける故出より蒼海公かの鉄槌を
投かけ副車にあたりて始皇を焉かし張良仕損じ漸逃て
下邳といふ所に項伯といひし朋友ありしかれが方にぞ忍びゐたり
或時張良下邳の圯へ出たりしに老翁ありて張良に謂て云ク汝ハ
王者の師となる相あり去れ我兵法の秘書あり汝に是を傳ん
と然も今日より五日めに暁く此橋に来るべしと約してされば
張良大きに悦び其日早朝に行てみれバはや老翁来り石
に腰かけ白眼して云ク汝老者と約して何として遅参するぞ
又今日より五日めに来るべしといふ張良やく夜半に行て
見れバ老翁又先へ来り石に坐し大に怒り汝又おくれたり是又

後てのたまへバ又翌五日にまたれといひて去れり張良今度ハ宵

よりゆきけるに半時ばかり過て老翁来り張良へ来りしを見て

大に感じ汝ぞよの孺子と志れ者我いまだ兵法を授ずして此書を讀べん

老翁則ち一巻の書を張良にあたへて後済北穀城山の下にて黄石を

見るべし是則我なりといひて失にける張良此書をみるに漢の

高祖を助け四百餘年の基業を開きり英名ハ三略これ也

陳仲猷可惜當時猶漏網不焚圯上老人書といへり

全編に云の兵法にて七書の第一也李靖が太宗に答ふる

唐へ黄金を渡し玉ひ此書を求め玉ひ帝崩御の時此

書を燒て呑玉ひ軍秘よすべからんと誓ひ玉ふ故に本朝の武

士八幡宮をうやまひ兵術として崇敬する事宜なるかな然れども

張良

張良

此書代々天子の御文庫にありて外人漫に見る事能ず八幡太郎義家卿も江匡房の門に入て此書の端々を学び給へり後白河院の御宇鬼一法眼武略の達人ゆへ禁中の軍書すべて法眼にあづけ玉ふ源義経鬼一が女皆鶴姫に通じて此書を盗出し玉へり義経此書を読理会して虎の巻を述玉ひしより三略の別名を虎の巻ともいへり

謡曲画誌巻五終